

甲状腺癌術後患者における全身状態、口腔・嚥下機能の経時的変化及び相関関係についての検討

**A study of changes over time and correlations among general condition, oral and swallowing functions in postoperative patients with thyroid cancer**

○山本みなみ, 伊原良明, 野末真司

○Minami Yamamoto, Yoshiaki Ihara, Shinji Nozue

昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔機能リハビリテーション医学部門

Division of Oral Functional Rehabilitation Medicine Dept of Special Needs Dentistry, School of Dentistry, Showa University

【目的】 甲状腺癌患者は、治療後に反回神経麻痺や頸部瘢痕拘縮により摂食嚥下障害を生じることが報告されている。しかし、甲状腺癌治療後における患者の全身状態と口腔・嚥下機能に関する関係の詳細についてはこれまで明らかとなっていない。本研究の目的は、甲状腺癌術後患者の全身状態と口腔・嚥下機能の経時的変化と相関関係について検討することである。

【方法】 甲状腺癌の診断にて外科療法を施行した患者 39 名(男性 8 名, 平均年齢  $54.5 \pm 20.1$  歳)を対象

とした。全身状態評価項目として体重, BMI, 筋肉量, 骨格筋量を, 口腔機能評価項目として舌圧, 口唇閉鎖力を, 嚥下機能評価項目として FOIS を用いた。評価時期は術前, 術後 1 か月(1M), 6 か月(6M), 1 年(1Y)とし, 各項目の経時的変化および各評価時期での相関関係について検討した。

【結果】 体重, BMI, 筋肉量は各評価時期で有意差は認めなかった。骨格筋量は Pre-1M で有意に減少を認め, その後も減少傾向を認めた。舌圧は, Pre-1M で減少傾向を示し, その後有意な回復を認めた。口唇閉鎖力は術後増加傾向を示した。FOIS は, Pre-1M で減少傾向を示し, 1M-1Y で有意な回復を認めた。

相関関係について, 体重は Pre で舌圧・口唇閉鎖力, 1M で口唇閉鎖力, 6M で舌圧, 1Y で舌圧・口唇閉鎖力と相関を認めた。BMI は Pre で口唇閉鎖力, 6M で舌圧, 1Y で舌圧・口唇閉鎖力と相関を認めた。筋肉量は Pre で舌圧, 1M で舌圧・口唇閉鎖力, 6M で舌圧, 1Y で舌圧・口唇閉鎖力と相関を認めた。骨格筋量は Pre で舌圧, 1M で口唇閉鎖力, 6M で舌圧, 1Y で舌圧・口唇閉鎖力と相関を認めた。

【考察】 甲状腺癌術後患者において, 全身状態, 口腔・嚥下機能評価項目に有意な変化を認め, 各評価時期で相関関係を認めた。以上より, 術後の摂食嚥下訓練は全身状態の改善に対しても有効であることが示唆された。